

令和6年度 日本大学スポーツ科学部 個人研究費 研究実績報告書

所属： スポーツ科学部 競技スポーツ学科

資格： 教授

氏名： 山崎眞紀子

<p>研究課題名</p>	<p>日本近現代作家の渡航経験に基づく作品研究—異国体験がもたらす作品形成分析</p>
<p>研究目的及び 研究概要</p>	<p>明治期以降の近代作家は、明治国家が西洋列国から文化や知識を取り入れて形成した。その先例に森鷗外（1862年～1922年）や夏目漱石（1867年～1916年）の存在がある。本研究では彼らの後続として「日本」および「日本語」を異国、他言語から相対的にとらえ、自分の創作活動の源としてきた作家の作品研究を行った。そのなかで①須賀敦子（1929年～1998年）、金原ひとみ（1983年～）村上春樹（1949年～）を対象作家とした。 須賀敦子作品研究に関しては、彼女が私淑していたナタリア・ギンズブルグに関する新たな資料も入手し、同時期に活躍していたイタリア人女性作家ダーチャ・マライニーニが来日した際には、その講座にも参加し、『ふるえる手』論を書き上げることができた。②金原ひとみに関してはこれまでで刊行されている全著作を深く読み込み、図書館で資料閲覧を行い『アタラクシア』論を年度内に発表することができた。村上春樹研究に関しては、村上の母校で行われた村上春樹アジア学会に出席し、中国人研究者の発表を聴くことができた。村上春樹の渡航経験や日本以外での読まれ方や評価のされ方の知見を得られたので、その成果を来年度には研究発表もしくは論文発表を行う予定である。</p>
<p>研究実績の概要</p> <p>研究の進捗状況・得られた成果・今後の課題・研究実績等</p>	<p>①の成果物としては、新・フェミニズム批評の会編『現代女性文学論』（翰林書房、2024年12月、全286頁）所収、「須賀敦子『ふるえる手』論—ナタリアの帽子」論（173頁～186頁）がある。 本論は須賀敦子が私淑していたナタリア・ギンズブルグとの二回にわたるローマでの交流の記憶を再現する構造の中に、ローマにあるフランチェゼ教会の祭壇画の一つである「マッテオの召し出し」を描いた画家カラヴァッジョの芸術に向ける熱情と自己像を須賀自身と重ね、作品を生み出す上で、光と影の効果的な描出方法を須賀自身の文学方法として現前させた作品と位置付けたものである。須賀敦子にとって、書くことは記憶をどのように加工し読者に印象深く伝えられるか、須賀の周囲にいた人物像に光を当てられるか、その方法をイタリアの文学者から学び、駆使した作品として位置付けた論文である。 ②は現代女性作家読本② 泉谷瞬編『金原ひとみ』（鼎書房、2024年12月、全142頁）所収「『アタラクシア』—ドーナツの穴という存在と不在」（86頁～89頁）が成果物としてある。 本論は、パリで活躍できるファッションモデルを目指し、生活費に追われながらも夢を実現するべく渡航して2年間果敢に挑戦し続けた若き女性を主人公に置き、金原ひとみがデビュー以来描き続けてきた若い女性が、社会から、世間から、男性から、何か得体のしれない存在から知らないうちに受けてしまう傷を描いた作品であり、そうした存在が、主人公の夫の眼を通して、主人公の存在と不在を描出した作品として論じた。本作には金原ひとみが実際にフランス・パリに6年間家族と共に暮らした渡航体験が生きており、異国で暮らす人間の姿をリアルに描いている。 作家において渡航体験は、それまで身に着けていた母語を相対化させ、新たなまなざしや文体を得る試金石となる。引き続きこの研究は継続したい。</p>